

音を合わせるにあたって

音を合わせるには、まず音が合わないということが具体的にわからなければなりません。そこで私は次のような段階で音が合うということを理解・実感させ、それを繰り返す言い続けることで、「音が合わないままでは演奏できない人間」を作ってきました。

1. ハーモニーディレクターで、純正律と平均率の長三和音を聞かせ、どちらがきれいだと思うか質問する。

90%以上の方は、純正律の和音のほうがきれいだと答えます。きちんと聴き分けられたことをほめながら、でもピアノの音は実は汚いほうの音なんだよ！なんてことを言ってみたりします。

2. 音は波であることと、波の数がきちんと合えば、唸（うな）りが生じずに音がきれいに合い、さらに2人なら2倍、3人なら3倍の音量になることを説明する。

黒板やホワイトボードに実際にグラフを描きながら説明します。シンプルに説明すれば、中学生でも十分に理解できますし、目で見てわかってから練習に入ったほうが、何倍も効果的です。

3. 楽器どうし（できれば同じパート）のベルをできるだけ近づけ、同じ音を吹かせてみる。

トランペットやトロンボーンなどのフロントベルの楽器がやりやすいと思います。最初はベルとベルの距離を3cmぐらいにしてチューニングの音を吹かせます。この距離で音が合わずに唸ってしまうと、プレーヤーはものすごく不快な感覚にとらわれ、嫌でも音が合うように自らピッチを調節してしまいます。

4. 少しずつ距離を離し、2m以上離れても唸りを生じずに同じ音を伸ばし続けられるようにする。

3が出来たらかなり褒め、次に少しずつ楽器間の距離を離していきます。10cm、20cm、30cm……。距離が離れるほど、プレーヤーに不快な感じがなくなっていくため、耳と気を使っていないとすぐにまた唸りが生じます。でも1回でも唸ったら、すぐに距離をもう一度近づけ、妥協せずにやっていきます。音感のいいプレーヤーどうしだと、3の練習で感覚さえつかめば、数分で2m以上の距離もクリアできてしまいます！！

5. 4について、いろいろな音でできるようにする。

距離は1mぐらいでいいので、チューニングの音だけではなく、さまざまな音で唸りがなく音が伸ばせるかを実験します。これも出来る人はすぐに出来ます。これをやると、同じ楽器でも演奏する音によってどれだけチューニングがあてにならないか（いかに常に音程に気をつけながら演奏をしなければならぬか）ということが実感できます。（ピストンは押せば押すほどピッチが上がっていくことなども理解できます）

6. 違うパートの楽器どうしでも、3～5ができるようにする。

違うパートどうしでも唸りがなくまっすぐに演奏できるかやってみます。できれば違う調の楽器がいいと思います。これをやると、楽器にはさまざまな調があること、それぞれの楽器には固有の癖

や楽器特有の癖（金管の第5倍音の上ずりや、クラリネットのどうしようもないAsの音など・・・）があることなども理解でき、お互いを理解しなければならないという意識が生まれます。

7. 2人組の練習方法を提示していく。

1～6は、簡単にできてしまう人となかなかできない人に分かれます。ですが、出来不出来にかかわらず、早い時点で2人組の課題を与えます。最初は同じパートどうして2人組をするほうがよいです。音感がいい子とそうではない人を組み合わせると、いい子のほうが悪い子を自然に教えるようになっていきます。音感がいい子どうしを組み合わせると、信じられないぐらいとてもよく響くので、他の人のよい見本となります。普段、なかなか指が回らず下手だと思われるような人でも、音感だけは優れているような場合も多いですので、いろんな組み合わせをやることで、お互いへの信頼感やお互いの不得意をフォローしあう心が生まれてきます。